
捕獲器

e l e v e n - 9

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

捕獲器

【Nコード】

N4942C

【作者名】

eleven-9

【あらすじ】

夏ホラー2007と銘の打たれた短編集。それを読む『私』の世界が、次第に悪意に侵蝕されていく。そして、次は…… 1 / 1 / 5 / 1 , 4 / 1

第一部

・コノ小説ハ全部デ四部カラナル

・コノ小説ヲドノヨウナ媒体ニウツシテモ効果ハ残ル

・物語ハアナタニヨツテ創ラレル

・ドウゾ先ニ才進ミ下サイ

5	1	5	4	6	0	4	3	5
1	/	/	/	/	/	/	/	/
1	/	4	1	1	1	1	2	/
4								
3								
1								

第二部

私は年季の入った椅子にもたれかかり、すっかり固まってしまった背筋を伸ばした。

ぎしりと、椅子と背中の筋が合唱する。

効果靨面。気持ちがいい。油をさされる錆びた機械の気持ちが分かった。

伸ばした右手には、本が握られたまま。長時間、私に同じ姿勢を

とらせた張本人だ。

かなりの厚みのある小説集。しかも、ホラー専門。数百ページに及ぶ闇の集合体が、伸ばした腕の先で強い存在感を放っている。

文化部一筋で育ってきた女子高生には、ちよつと重い。

そう感じたのも束の間、私の非力な指から本が滑り落ち、その重厚な角とフローリングが衝突した。

「ひあ!？」

予想外に大きな音に、私の体が強張る。

お母さんが二階の物音に過敏に反応する性格で、私が大きな物音を立てると、すぐに部屋に駆け込んできて小言をもらすのだ。

おかげで私まで音に敏感になってしまった。

慌てて本を拾い上げる。が、よく考えたら、今日から三日ほど両親が家にいないことを思い出し、私の動揺が杞憂だったことに胸をなでおろす。

そう。

毎年この時期だけは、私はうるさい両親の呪縛から解放たれるのだ。

現在、私の両親は、お盆で里帰り中。

……とは名ばかりの、夏のバカンス。

高校生になってから、私はお盆の里帰りに行かなくなった。

両親と少しでも離れている時間が欲しい。そんな他愛もないことが理由だ。

部活で創作活動のための合宿があると嘘をついて、一年生のお盆のときも二年生のときも行かなかった。そして、今年もまんまとその作戦は成功したのである。

両親も表面上は私をたしなめるが、二人きりで旅行ができる絶好の機会と、まんざらでもないみたいだった。毎年、満面の笑みを添えて、山のようなお土産を持って帰ってくることから、それが伺える。

一人きりの満ち足りた世界。

一年の間で僅かしかないこの貴重な時間。それを使って、私は大好きなホラー小説を読むことに没頭していた。

クーラーの効いた部屋で読書三昧。虫のコーラスをバックミュージックに、気のゆくまでごゆるりと。

うん、贅沢の極み。

しかし、昼頃から読んでいるうちに、もう日付が変わる直前になってしまっていた。

「ちょっと……のめりこみすぎた、かな？」

眼鏡をかけなおし、机の上の置時計を睨む。時間が戻らないかなあ。

とりあえず、今読んでいる本が読み終わったら、お風呂に入って寝よう。そして、明日、また新たな本との出会いを探しにいこう。

そう心に決めると、私は分厚い本を机の上に置き、茶を挟んでおいたページを開いた。

この本が読み終わるのも、もうすぐだ。残すところ三、四作品……読み終わるのが少し寂しい気がする。そう感じさせるほど、今読んでいる本は傑作揃いの小説集だった。

夏を題材にした短編ホラー集『夏ホラー2007』と銘を打たれたこの本は、図書館の一番奥の棚、その下段にひっそりと置かれていた。

運命的な出会いを感じた。迷わず手に取り、貸出しカウンターに駆け込んだ。

私の目に狂いはなかった。小さい頃から、いつも本ばかり読んできた私だが、これほどの内容の小説集にはお目にかかれたことはない。元々はネット上で公開された企画小説らしく、携帯やPCで数多の読者に読まれ、好評を博した結果、書籍化したらしい。

「こつこつという出会いがあるから、やめられないのよね」

独りごち、ほくそ笑む。

軽快にページをめくる私の指。淀みなく文字を追う私の両目。そして、ついに最後の作品に到達した。

胸が高鳴る。ここに至るまでの作品は、どれも甲乙つけがたい素晴らしいホラーばかりだった。最後を飾る作品は、一体どのような恐怖を紙面の上で織り成してくれるのか。
私はその作品の題名に目をやった。

『捕獲器』

e l e v e n - 9

白い紙の真ん中に、そう書いてある。

e l e v e n - 9? 変なペンネーム。どういう意味だろう。

「……119番?」

違うか……わからないや。

内容に関わらないところに拘っても仕方がない。私はページをめくってみた。

自分の眉間に皺がよるのが、克明にわかった。

そこに書かれていたのは、第一部と称された、奇怪な四個の箇条書きと日付のような数字の羅列だった。

- ・ コノ小説八、全部デ四部カラナル
- ・ コノ小説ヲ、ドノヨウナ媒体ニウツシテモ効果ハ残ル
- ・ 物語八、アナタニヨツテ創ラレル
- ・ ドウゾ先ニ才進ミ下サイ

1 / 1 5 / 1 4 / 1 6 / 1 0 / 1 4 / 1 3 / 2
5 / 5 1 / 4 3 / 1

捕獲器

言いたいことがわからない。それに、最後の意味不明な数字の羅

列……日付……じゃないよね。0月なんてないし。

これではホラーというより、ミステリーだ。

奇をてらっただけの、こけおどしかな。

ために最後のページをめくってみた。

そこにも意味不明な数字の羅列があるだけ。

私は、胸の高鳴りが急速に静まっていく感覚に悲しさを覚えた。

最後の作品だけに期待が高かったが、これだけは外れだったか。

「ふう……」

嘆息を漏らし、落胆の度合いを表すも、同情してくれる他者がいるわけでもなく。

「……」

意味不明な箇条書きを見つめる。

やはり、意味不明。

仕方がない。折角ここまで読み進めてきたのだから、勢いに任せて、これも読んでしまおう。

私は満杯の胃袋に、無理に残り物を詰め込む感覚で、最後の作品を読み進めていった。

第二部は至って普通の小説だった。

一人の男性がネット小説を読んでいるところから始まる。題名は、今、私が読んでいる小説と全く同じ。作者名もだ。

なるほど、小説内小説ね。作中の登場人物と読み手をリンクさせる手法。個性的とは言いがたい。

話を進めていくと、この男性が、彼が読んでいるネット小説中の『何か』に、日をおうごとに現実世界で遭遇するようになることがわかった。

作中にその『何か』に関する描写は書かれていない。その代わりなのか、初めて『何か』が現れたページの隣に挿絵があった。

「何……これ」

思わず口をついて出たその言葉が、挿絵を見た私の素直な感想だった。

描かれた背景は、暗い廊下。普通の家の、普通の廊下。そこにいる。

暗闇のより濃い廊下の奥。闇が膜を成すその空間に、かすかに輪郭が浮かんでいる。

こちらを見ている。主人公を　　主人公の先にいる私を凝視している。

こいつを、どう表現したらいいんだろう。

例えるなら、　　のような……いや、　　にも見えるかも知れない……

嫌な絵だった。怖いというより、気味が悪い。不吉な印象を与えてくる。

そういえば、挿絵があつたのは、この本では今回が初めてだ。

「……なんで？小説なら、文章で勝負しなさいよ」

見えぬ作者に文句をつけたのは、自身の内に湧く、言い知れぬ不快感を払拭するためのものだった。

鼓動に合わせて膨らむ、薄い膜の風船……心を満たし、侵蝕する不快感の塊。

それが私の内側に根を張り始めていた。

本から手が離れる。あれだけ渴望していた読書という娯楽を、これ以上続ける気にならなくなっていた。

この最後の作品が原因だ……

私は、机の端によけておいた棊を挿絵のあるページに挟み、本を閉じた。

最後まで読みきるつもりだったが、やめよう。今日はもう、お風呂に入って寝る！

そう決めると、心が幾らか軽くなった。

勢いよく椅子から立ち上がり、箆笥からパジャマと下着を掴み出して、廊下に出る。

廊下を夜が支配していた。虫の声も聞こえない。

一瞬、あの挿絵が脳裏をよぎった。

背中を幻の虫が這い、身震いを起こさせる。

しかし、あの奇妙な『何か』が現れることもなく、私は廊下の電気をつけて闇を消し去った。

光が広がる。

安堵感が、幻の虫を追い払ってくれた。

第三部

私にとって、読書の次に好きなのが、お風呂に入ること。

肉体のみならず、心の垢まで落とす、この素晴らしい習慣を始めた人間に、私は感謝の意を表したい。人類の発明の中で間違いなく五本の指に入る。

この至福の時の中、私は頭を洗いながらそんなことを考えていた。栓を捻り、熱めのシャワーを降らせる。

髪を包む白い泡達がお湯と共に流されて、私の体を滑り落ちていく。役目を終えた彼等は、排水孔へ姿を消しつつ、コポコポと小さな断末魔をあげた。

「ご苦労様と、擬人化されたシャンプーの泡にお別れの一言。

他人に聞かれたくない私の癖だ。

完全にシャンプーを流し終えると、私は顔に掛かる髪を後ろに流し、両手で顔を拭いた。そして、鏡を覗いて髪を整え「うっ！？」

あるはずのない他者の視線。

それを背中に受け、私は反射的に振り向いた。

……誰もいない。バスルームの扉があるだけ。

心臓がリズムカルに跳ねている。胸の奥が痛い。

錯覚にしては、あまりにリアルな気配だった。

「もう……ばつかみたい」

過敏になり過ぎている。頭の片隅に、あの挿絵がこびりついているのかも知れない。

あの小説、まんまと私に恐怖を植え付けたいらしい。内容は大したことなかったのに。

「……挿絵のせい？」

そうだ。あの小説だけ挿絵があったから、かえって強く印象に残ってるんだ。

論理的な思考を心がけ、気持ちを落ち着かせる。

ありもしない存在に脅えるのは愚かだ。ホラーは、あくまで虚構。虚構だから娯楽たりえる。

さあ、現実に戻ろう。髪を整えなきゃ。

すっかり曇ってしまった鏡に桶で湯をかけ、私は身を屈めて覗き込んだ。

瞬間。

現実と虚構が反転する。

神経に走るざわめき。

悪寒。

湯気に浮かぶ影。

なにこれ　鏡の中。

嘘でしょ　いる。

だって、あれは　私の後ろに。

本の中だけの　あいつがいる。

挿絵の中の、あいつが　あいつがいる！

「ひっ……」
目を逸らせない。鏡の中に映るそいつの視線が、私の視線を捕えて離さない。

なんで！？嘘よ、こいつが現実にいるはずない！

否定の言葉を心中で述べるも、効果はなかった。「何か」
そっとしか言えないそいつは、依然として、私の背後に佇んでいる。
扉は「何か」の後ろ。退路は塞がれている。
私に何をするつもりなのか。

脳裏を巡る想像が、私自身を苦しめ、呪縛となって自由を奪っていく。

その合間も、鏡の中に映るそいつは、極めてゆっくりとではあるが、私に近づいてきていた。

何か聞こえる。

呟き？

こ、こいつが呟いているの？まるで みたいなのに？

「1 / 4 3 / 1…… 1 / 4 3 / 1……」

金属の擦りあう音に似た声で、意味の分からない言葉を繰り返している。

理解できない。この「何か」の全てが。

理解できない存在ほど恐ろしいものはない。恐怖とは、その大半が理解の外からやってくる。

その象徴のような存在が迫ってくる。

天体の動きのように、ゆっくりと。

そして、その存在が後ろ髪に触れた瞬間。

私の心が恐怖を受け入れきれず、ついに弾けた。

右手がプラスチックの桶を掴んだ。強度に難があることなど考えもせず、私は振り向き様、それを横薙に払った。

重量感のある手応えが肩まで走る。横面を痛烈に殴打された「何か」は、湯船に落ち、人間の赤ん坊みたいな悲鳴をあげた。

自身の行動の成果に喜ぶ暇はない。

扉を押し開き、私は全裸のまま駆け出した。

助けを求めるべきだ。あんな得体の知れないもの、私がどうこうできる相手じゃない。

全裸であることに多少の躊躇いを感じつつも、私は玄関を目指し

いる。

玄関に。

あいつが。

お湯に濡れて、ぬらぬらと光る『何か』が、私を見つめている！

「ひい！」

出口を封じられた私の足は、二階へと方向を転じた。

階段が長い。長く感じる。

ようやく私の足が二階の廊下を踏んだ。

私は、すぐ右手にある自室に飛び込んで部屋の鍵を閉めると、ベツドに飛び込み、頭から布団を被った。

「なん、なに、なにが、れ、あれ、なによお!？」

歯の根が合わない口から、文にならない言葉をひたすらに漏らし、私は今までにないほど強く、全身を震わせていた。

逃げるにも逃げられない。窓から飛び降りれば、間違いなく重症だ。その選択を選ぶほどの勇気はない。

どうしたらいいの？何で私を狙うの？なにが原因なの？

……原因？

「あの……小説？」

ぼつりと、呟く。

そうだ。今の状況、あの短編集の最後の小説と、全く同じ状況じゃないか。

原理は分からないけど、捕獲器と題された小説に原因があるみたいだ。

最後まで読めば、何か分かるかもしれない……

私は警戒しつつ、ベッドから降りた。

素早く本を手にし、再びベッドへ潜る。布団の隙間から入る蛍光灯の光を頼りに、私は最後の小説を読み進めた。

やっぱり、同じだ……主人公が自分の部屋に逃げ込んで、自分が読んでいた小説に原因があると気づくのも……

何かの呪い？

いや、結論を出すのはまだ早い。とにかく最後まで読まない……震える指でページをめくり、早鐘の如き鼓動に心を乱されながらも、私は『捕獲器』と題された小説を読み進めていった。

残りページ数も少なくなってきたところで、小説の主人公があることに気づく。

第一部の箇条書き。その最後。

意味不明なあの数字は、携帯に関係があるのではないかと書かれている。

主人公が光明を見出した。それは、私にとっての光明でもあった。数字……そうだ！あの数字は、そのまま携帯で文章にできる！元は携帯でも読めるネット小説だから、そこにかけて暗号なんだ！

私は枕元に置いたままの携帯を掴み取り、メモ機能を使って、箇条書きの最後の一文を打ってみた。

ここに希望がある！きつとそうに違いない！早く完成させるんだ！

早く、早く、早く……！

「早く、は……や……」

しかし。

その文が完成するにつれ、私の指の動きが遅くなっていった。指が、絶望にからめ取られていく。

完成した文が、携帯のディスプレイでせせら笑っていた。

「こんなの……や……だ……」

これは……この小説は……

私の視線が、意図せず小説に落ちた。

私と同じ絶望を味わう主人公。

彼は最後の第四部を目にした後、真実に気づいた。

そして、その先に描かれた、吐き気を催す最後。

「さ、最初の箇条書き、あれは呼び水だ……！読むは呼ぶに繋がる……がああ！だ、第四部を……！た、頼む！俺を『読んでいる』あんだ、この小説の第四部を変えてくれえ！う、うわ、体、溶け、溶けて、消化されてる、吸収され、されてるううう！早く、は、い、ぎひい！あういいいおうぐやぎ」

それが彼の最後の台詞だった。第三部は、そこで終わっている。

第三部を読み終えると、ひとりで最後のページが開かれた。

第四部。数字の羅列。

それを見た私の心に、ひびが走った。

法則に気づき、それを解読できるようになった私には、第四部の意味が分かってしまった。

そういうことだったんだ。

これは 畏だ。

ホラーを好む人間を捕獲する器だ。作者によって、悪意と嘲笑をこめて解き放たれた、貪欲な狂気だ。

『がちゃ』

扉が開く音がした。私の体が恐怖の鎖に縛り付けられた。

鍵は全く無意味だった。第四部を解読してしまった瞬間、全ての防御は無効となった。

読んじやいけなかつたんだ……第一部は一方通行の入り口……見た時点で奴は干渉を開始してくる……私みたいにいきなり姿を見せたり……本の中の主人公みたいに、少しずつ出てくることも……そして第四部を獲物が解読した時点で……虚構ノベルが現実リアルとなって現れる……絶対に逃れられない……第四部をどうにかしないと……

逃れ……られ……

嘘……？

「嘘だ、夢でしょ？だよな？ありえないもの、あるはずないよね？それこそ小説だよ、夢、嘘、夢、夢」

震える声で、私は起こっている全ての否定を試みた。その否定を、小さな音が否定した。

『何か』がフローリングの床を踏む音。

もう選択の余地はなかった。布団を被ったまま、ベッド脇の窓に張り付く。

大怪我してもいい、窓から

開かない。鍵はかかってないのに。

割れない。どんなに強く殴っても。

「いや、いやあああ！」

頬を何度も涙が流れていく。小さい頃、迷子になったときみたい

に。いきなり布団が剥ぎ取られた。

驚いて振り向く。

私を見る。

数十という『何か』が。

私と同じ視線で。

瞬きも忘れた私の目の前で、じみた が、残らず溶け

て消えた。ぼつかりと開いた は、 を生やした となり、

を溢れさせている。

その から流れてくるのは、お風呂場で呟いていた、あの言葉。

1 / 4 3 / 1 ……

前の数字が携帯のボタンにかかれた数字……後ろの数字がそこを押す回数……

つまり……『えさ』

「そ、んなの、いや、いやだよ、やめて、やめてええ……」
ベッドの上で後ずさる私の手に、何かが触れた。

夏ホラー2007。

第四部

めてお腹の中身が嘔嘔死んじやう死んじやうよわたし死んじやう
よ痛い痛い腕ちぎれ助けてええ！！たすげでくださお願いじま
だすけてだすけて！！い、いだいだいだいだすげで だ じ
ゆぐえ でええ だっ じゆえ え え っ
げう

だいよん

をぶ

読まな

捕獲器

4
/
3

2
/
1

7
/
1

1
/
4

4
/
1

(後書き)

読んで

いただけましたか

それは

重畳……

一名様、捕獲……

捕獲器

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4942c/>

捕獲器

2008年8月29日18時27分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。